

リハビリテーション科

リハビリテーション（以下リハ）科では、急性期・回復期に留まらず、その後の生活維持・社会参加場面で障害を持つ方々に対して、機能の改善のみならず、障害が残存した状態でも生活の質が向上し、社会的な役割が持てるように、様々なアプローチを行っている。特に当院では、脳卒中をはじめとした脳神経疾患、外傷を含めた運動器疾患、呼吸・循環器などの内部障害、各種治療に伴う廃用性変化への対応など様々な障害に対する急性期早期からのリハに加え、摂食嚥下障害、高次脳機能障害などの専門的なりはやがんのリハにも力を入れてきた。また回復期リハ病院が充実した現状でも、併存疾患への専門的治療継続などで転院受入れ困難な方々に対する回復期レベルのリハ医療が提供できる病院が少ない。その中で総合病院内にリハ科専用病床を必要としている症例はいまだ散見される。小児期に障害を認めた方も、その後の生活で支援を必要とする場面があり、進学・就職など変化に応じたりハ支援も手がけている。

診療科としての役割は、現在10人前後のリハ科入院患者さんに加え、地域からの外来紹介患者さんや院内他科入院患者さんに対する処方対応や近隣施設の往診、院内外での教育活動などを担っている。

【2024年度の情勢と活動】

新型コロナウイルス感染症（以下コロナ）患者の各診療科協力体制での運営の中でリハ科でも主治医としての受入れを行ってきた。総合病院においてリハ科専有病床を持ち運営している中での役割として、2023年度同様に重症患者・重複障害患者・回復期病院転院困難患者を中心に入院・外来での診療を行ってきた。

また地域支援の取り組みの1つである国交省短期入院協力病院としても受け入れを行ってきた。更には高次脳機能障害支援拠点病院として2024年度も20人程度の新患を県内外より受け入れており、小児や社会的行動障害の強い方も多く含まれている。啓発活動として医療従事者対象とした講演会は

Webを用いて実施し、地域支援としての家族会支援や対面での研修会なども対面で実施してきた。

また2019年度開設した地域障がい者総合リハビリテーションセンターの運用では、外来機能として整形疾患・高次脳機能障害を中心に診療を行ってきた。またアリーナを利用した障がい者スポーツの開放も再開し、常時一定数の受入れを行ってきた。県主催のパラアスリート発掘事業にも協力してきた。

【2025年度の活動方針】

当院で以前より専門としている嚥下障害に関しては、院内急性期入院患者のみならず、地域医療機関からの紹介も受入れ、昨年に引き続き年間で1000件以上の嚥下内視鏡検査、300件近い嚥下造影検査など実施していく予定である。また高次脳機能障害者支援では、県からの委託事業である医療体制連携強化事業として、他医療機関への支援・連携や各種マニュアル作りなど継続する予定である。また、新専門医制度が開始された中、リハ専門医教育や初期研修医に対するリハ医療の啓発は、総合病院の中でのリハ病棟運営、更にはリハ科診療に必要とされるあらゆる機能が揃っている強みを利用するなか、引き続き行っていきたい。

地域包括ケアシステムが充実する昨今、あまり注目されなかった若年の中途障害者に対する支援を地域で可能となるよう、「地域障がい者総合リハビリテーションセンター」の運営は、一般リハ外来に加え、自動車運転再開に向けた評価を含め高次脳機能障害者を中心とした専門外来、また障がい者スポーツなど、未だ地域でも支援可能な施設が乏しい分野での活動を広げ、新たな地域支援モデル構築を進めていきたい。また当事者同士や家族による支援（ピアサポート事業）などでも当院独自に進めていく予定である。またアクティブラーニングの場として、聖隷クリストファー大学との連携も進めていく予定である。

これらの活動を通して、今後も聖隷の強みである医療・福祉・教育の相互協力の上、引き続き地域で求められる医療や医師の教育などに貢献していきたい。

（部長 片桐 伯真）

(2025年4月現在)

(単位：人)

【外来患者】

(単位：人)

【平均在院日数】

(単位：日)

年 度	2020	2021	2022	2023	2024
日 数	91.0	49.0	35.5	28.4	46.3